

私が感じるこの一年の成果

社会福祉学部 社会福祉学科
地域福祉コース 山崎ゼミ
有馬 希

① 成長と気づき

サービ斯拉ーニングを通して、私はどう成長をしたのか。確実に“ここが変わった”といえるようなことは特に思い当たらないのだが、新たに出会う人たちと接する機会に多く恵まれ、今までよりもずっと、他人と接する方法を学べたのではないかと思う。特に夏季の施設体験では、自分の行動の責任が自分に返ってくること、また初対面の施設職員の方、利用者の方々と実際に接するという緊張感の中で、学校に通うだけでは得ることのできない経験をする事ができたと思う。私はあまり積極的に他人と接する機会を作り出すようなタイプではないと自覚しているため、自分から新しい人間関係を構築するのは難しい。しかし、社会に出るうえで他人と疎に交流できないというのはとても困るというか、大きな痛手であると感じる。今後こういった施設体験はまたあるのだろうが、それがもし自主申請によるものだったとしたら、今までと同じなら申請しようとは思わないだろう。というよりも、なんらかの心境の変化でもない限り自分から行動を起こすことはないのではないかと思う。それはボランティア活動だからとか、働くのが嫌だからではなく、私が見知りかつ人間不信気味だからなのだが、今まではそう言って避けられていたものも、今後社会に出ていくのならば避けられないものだと思うのだ。克服ないし改善をしていかなければ困るのは私だけではなく、就職先にまで迷惑を掛けるようなことがあってはならないだろう。なにより福祉職というものは人と関わってナンボと言うべき職業だ。次年度には実習があると聞いているし、学年全体で行うのならば当然強制参加だろう。新たな経験を得られるという面だけでなく、今まで関わったことのない職種に関わることで、今までとは違う視点で物事を見られるようになるかもしれない。もしくは新たな進路に目覚めるかもしれないし、はたまた何の得るものもないかもしれない。それは実際に体験してみなければわからない事ではあるが、私の場合は新たな出会いというだけで、価値のあるものになると思う。

② 地域の現状、課題

私が体験に行った施設の話だが、私たちのグループは施設側に提示する課題として、“広報”について挙げた。その施設の活動内容どころか、施設自体が地域に対して発信されていないのではないかと感じたためだ。もちろん、利用者の方は私たちが活動に行った短い時間でも多く見かけた。利用している方々に愛されているというのは、職員の方と利用者の方との雰囲気から察することができたし、何より実際に体験することで実感してきた。しかし、利用者の新規確保という面については、私たちの活動中には見受けられず、また施設のホームページも活動日誌の更新に滞りが見られるなど、力を入れていないわけではないが、あまり芳しくない状況なのではないかと思ったのだ。私たちの体験した施設

の活動理念“ともに生きる地域社会を”は、決して施設を利用する方に対してのものだけではないはずだと思う。その地域全体を通して伝わっていくべき素晴らしい考え方だと思うし、もっと広報活動に積極的になるべきなのではないか。

また、それらを通して感じたこととして、地域全体として“福祉”というものに無関心と言うか、自分にはあまり関わりのないものとして見ている傾向が強いのではないかと思った。自分または身近な人が何か障害を抱えてしまった時に、いったい自分たちの住む地域のどんな場所が助けになってくれるのか、親身になって寄り添い、その後も長く付き合っていくことができる施設があるのかということは、実際に調べてみないことにはわからないものだと感じる。そして、その施設では対処ができない重度の障害だった場合にはどんな場所を頼ったら良いのかということは、その施設の受け入れられる上限を知っていなければ、余計な盥回しに遭ってしまうこともあるのではないだろうか。

施設の側が広報に力をいれ、“どこそこにはこんな施設がある”ということを知ってもらうとともに、地域住民の側からも、“福祉”というものへの歩み寄りが必要なのではないか。私は施設での体験活動を通してこう感じている。

ゼミで学んだ今の私と今の地域について

社会福祉学部 社会福祉学科2年
地域福祉コース 山崎ゼミ
伊藤 楓

このゼミで学んだことや、サービ斯拉ーニングに行き気づいたことなどを①自分の成長と気づきについて、②活動を通して見えてきた地域や市民活動の現状や課題についての二つのコンテンツに分けてこのレポートに記述していく。

①自分の成長と気づきについて

まずこの1年間のゼミや夏のサービ斯拉ーニングからの自分の成長と気づきについてだが、私は自分の成長として一番感じているのは、責任感である。1年前の自分と比べて、大きく責任感が芽生えたと感じる。それは、最近だとゼミでの合同発表会で、グループで研究したことで芽生えた実感できたし、夏に行ったサービ斯拉ーニングからも感じる事ができた。自分はグループで行動してもそのグループないで意見する事はほとんどなかったし、グループが間違った方向に進んでいると分かったら、自分だけ行動を変える人間であったのだが、サービ斯拉ーニングではグループに意見をし、むしろグループのメンバーに積極的に働きかけるといふ、いつもとは違う役割をした。もちろん進んでやってはいないし、私がやらなくても誰かやってくれたのかもしれないが、その役割を担って、経験してみて、とても良い経験になったと感じている。いつもであったら一人で行動するところを皆で行動し、その結果より良いサービ斯拉ーニングになったのではないかと考える。

そして、これを書いていて考えたのだが、私にはもう一つ成長したと思えることがある。それは、班行動ができるようになったことである。自分の成長したことを先ほどから書いているが、班行動が自然にできていることに気がついた。班行動することが私自身の成長に必要であったのだと感じた。

私の趣味は読書で、特技はウィンタースポーツである。人と関わることは苦手で、コミュニケーション能力は低い。これは、1年前にゼミのエントリーシートに書いた、私の私自身に対する評価である。しかし、今の私が私の自己紹介を書くときは、アピールポイントは変わるのではないかと考える。私の趣味は、読書である。これは変わらない。特技はウィンタースポーツと、初対面の人とでもコミュニケーションがとれること。後者は1年間のゼミやサービ斯拉ーニングでも培ったものである。長所は真面目なところ、短所は柔軟性に欠けること。この長所と短所もゼミで気がついたことである。特にこの2つは研究発表の準備をグループでしているときに気づいた。

②活動を通して見えてきた地域や市民活動の現状や課題について

次に2つ目のコンテンツである、活動を通して見えてきた地域や市民活動の現状や課題について考えていきたいと思う。私がサービ斯拉ーニングで行った施設は愛知県知多市の名鉄朝倉駅のすぐ傍にあるところであったが、山があり、古くから立っているであろうお店が並び、とても静かなところであった。しかしそれ故に、都会のように整備さ

れておらず、道路の歩行者が通る道は狭く、ガタガタしていたように感じる。また、ああいった田舎には、私たちに道端ですれ違う人たちは高確率で挨拶をしてくれたし、都会ではあまり見られないご近所付き合いが見られたが、サービスラーニング先の施設の利用者は、その施設の近くに住んでいる人か、または車などの移動手段がある人で友達がいる人と、かなり限定されているようであった。これは、どのNPO法人も同じことが言えるのではないかと、先日のサービスラーニングの報告会で分かったことであるが、NPO法人自体も、抱える課題に対して経済的な理由や地域の福祉が少ないことから、全力で取り組んでいるわけではない事もわかった。私が行ったサービスラーニング先では、施設から遠いところにスンでいる人が来るための手段がないという課題を抱えていたが、調べたところ、地域を回るミニバスというものがある。そこまで手が回らないのか、何らかの使えない事情があるのかはわからないが、そういうものを地域の住民でもNPO法人でも、もっと自由に使えるようにならなくては、地域の福祉というものは、足りないままなのではないかなと考えた。

活動の学びと地域の居場所の必要性について

社会福祉学部 社会福祉学科 2年
地域福祉コース 山崎ゼミ
篠ヶ谷円

① 自分の成長と気づきについて

サービ斯拉ーニング活動全体を通して自分が成長したことは、周りの意見に流されず、発言できるようになったことである。私はグループなどで意見を出し合うようなとき、リーダーのようなまとめ役に合わせ、周りの人の意見を重視してしまいがちであった。同じサービ斯拉ーニング先に行くメンバーには率先してグループをまとめるような人がいなかったこともあり、誰かがまとめてくれるのではなく、自分が率先して発言してメンバーの意見を伝え合おうと考え、できるだけ自発的に自分の意見を発言し、グループ全体の意見がまとまるように心がけた。自発的に発言することで、グループのまとめ役に少し成長できたのではないかと思う。

気づいたことでは、メンバーとの連携、グループワーク、発表の難しさである。グループワークや発表ではメンバーとの連携がとても大切であることを実感した。具体例として、企画やテーマが正しく伝わっていないなど、分担作業に理解の差ができてしまったことである。そのため企画の準備が進まなかったり、要点が絞り切れていない浅い研究になってしまった。他には活動先での集合時間に遅れる等の連絡が無いなど、グループ全体が困惑してしまうことも起きたのである。このような状態ではメンバーの意見がまとまることはない。グループで身になる活動を行うには連絡を密にすることが必要だとわかる。また、グループワークでは、メンバーの役割分担や進行を行うとき自発的に発言するよう心がけたが、他のメンバーがいつもの私のように意見に流されてしまい、ほとんどが私の意見になりそうになったのである。全員が自分の意見が言えるようグループワークの進行をすることは、今まで誰かに任せてしまっていた私にとってとても難しくあったが、挑戦できたことは私の成長につながったと思う。そしてグループ発表では、パワーポイントの作成や発表するときの話し方に工夫が必要だと気づいた。同じ発表内容でも写真やイラストがあるだけで理解しやすくなり、字も長文で載せるより簡潔にまとめ、話すときに補足の説明をする方が相手にとって見やすくわかりやすい。その話し方も紙を見ながらただ発表するより、相手に話しかけるような発表とでは受け取り手の印象が大きく変わることが分かった。私はパワーポイント作成では字の大きさなど工夫ができたが、発表では読むだけになってしまったことが反省点である。

今後は、これからもグループワークは自発的に発言するよう心がけ、メンバーとの連携をしっかりとっていきたい。パワーポイントはよりわかりやすく作れるよう考え、発表での話し方も挑戦していきたいと思う。

② 活動を通して見えてきた地域や市民活動の現状や課題について

特定非営利活動法人ゆいの会は「共に生きる地域社会を」と「助けあい・学び合い・育ちあい」を理念とし、地域密着で活動する NPO 法人である。活動内容は助けあいサービスや

配食サービス、ゆいサロン、さをり織りや陶芸を行うふれあい活動がある。ゆいの会は地域の居場所としてふれあい活動を行っていること、そして地域の方たちの生きがいを知り、ゆいの会のような地域の居場所はとても大切であることがわかる。そこで私はグループ研究にて居場所の定義、居場所の必要性について調べ、地域に居場所があることで孤立を防ぎ、人と人とのつながりが増えることにより、生きがいや地域づくりに繋がっていくことを知る。居場所はその人自身を生かしながら過ごせる場所だけでなく、情報交換の場となり、お互いの理解が深まることで、信頼関係が生まれる。また、それぞれの抱えている問題や悩みを共有し、相談し助け合うことで、地域にあるさまざまな問題などに取り組んでいくきっかけづくりになるのである。そのような顔が見える地域は、幼児虐待などのさまざまな事件や不審者の侵入などの防犯対策、独居老人の孤独死といった事故も防ぐことができる。このことも踏まえると地域に居場所は必要であり、居場所を提供しているゆいの会は素晴らしいNPO法人である。しかし、このような居場所を提供する団体や施設は少なく、そういった居場所を増やしていくことが今後の社会の課題であり、より多くの地域の方たちに集まっていただけるような交通手段や広報も課題に上がる。交通では、生活バス四日市（地域の新たな公共交通ニーズを開拓し、もってバスを活用した地域活性化と福祉の増進に寄与する。）のような地域住民と地元企業による新しいバスサービスシステムに取り組むところがあり、参考になる。広報では見やすいホームページの掲載、更新。他にもビラ等を配るなど、NPO法人が積極的にアピールすることも大切だと考える。参加や呼びかけは学生にもできることなのでこれからはより地域に関心を持ち、地域に参加し、より暖かい地域づくりに貢献したいと考える。

参考資料：生活バス四日市 <http://www.rosenzu.com/sbus/index.html>

ふれあいの居場所さわやか福祉財団 <http://www.sawayakazaidan.or.jp/ibasyo/index.html>